



緑の架け橋

会報第32号

(協賛会員登録呼び掛け)

2018年09月30日

日中緑化交流基金助成事業

IFCCプロジェクト代表:佐藤晴男

協賛団体:NPO法人アジアロード

寧夏・固原市、内モンゴル・多倫県(2件)4期目の事業へ

寧夏・固原市と内モンゴル2件(灤河源プロジェクト、蒙京津冀プロジェクト)の四期目を実施してきました。

IFCCの「日中の緑の架け橋を」事業は2002年から足掛け17年となりました。

～今だから、大河の一滴を育むために～

寧夏・固原市事業実施地(西吉県)・四期記念植樹で、ボランティアの皆さんと(2018・4・21)



蒙京津冀プロジェクト 基地本部で記念植樹(2018・7・21)



緑の架け橋へ

2002年11月緑の架け橋推進センター設立、その後推進母体の改編を行いながら足掛け16年を経ました。

これは日中緑化交流基金の助成を得た事業主催・IFCC国際友好文化センターの呼び掛けによるものです。

2008年11月、緑の架け橋推進センター解散。その後、「緑の架け橋」の活動は、事業主催のIFCC国際友好文化センターの下で「緑の架け橋プロジェクト」として継続され、2014年まで9つのプロジェクトを実施、終了。累積205人が参加。

2014年度(11月開始)から、NPOアジアロードを推進協賛団体として内モンゴル2ヶ所、寧夏回族自治区1ヶ所を開始。

3カ年計画が2017年で終了しましたが、2017年度(2017年秋～2018年秋)から四期目の助成を受け継続してきており、五期(2018年11月～2019年10月)も内定を受け継続することになりました。

本、助成事業は時間が限られていますが条件が許す限り継続していきたいと思っております。



本会報は会員以外にも送付しております。趣旨協賛いただける方はどなたでもご参加できます。活動へのご協力をお願い致します。

IFCC 国際友好文化センター

〒162-0801 東京都新宿区山吹町333 辻ビル405

TEL.03-3268-4387 FAX.03-3268-6079

口座:中央労働金庫市ヶ谷支店(普)0858119 郵便:00130-9-425994

会報は事業主催(IFCC)の植林プロジェクト特集となります

一本ずつ灌水されている凄さ

実施日：2018年4月19日～23日

宮秋 道男 NPO法人アジアロード理事長

【固原市の植林事業地を訪ねて】

「植林事業のセレモニー」が行われる固原市西吉県の現場は、山道をしばし走りながら、山あいの先の小高い丘陵地にあった。途中、山肌は削られ、畑にしようとしている所もあれば、それを元に戻しているかのような所が多く見られた。まさに「退耕環林」政策のせめぎあい的一端を見る思いで、複雑だったが、現地ですぐ多くのボランティアの方の明るさが、その気持ちを晴れさせてくれた。

佐藤晴男団長が「私どもは皆さんの植林事業の少ししか役に立てないだろうが、これまでも今後も確実にすすめ、日中の架け橋になりたい」という力強い挨拶の後、記念碑の前での記念撮影のあと、植林セレモニーを行った。

中国で進められている砂漠化防止・植林緑化事業に、日本の援助があったとしても、それは中国国内の事業規模からいうと、ごくごく一部に過ぎないだろう。ましてや「緑の架け橋プロジェクト」が当初より参加し、面々と続けてきたとしても、その活動は中国側からみたら、ほんの一部に過ぎない。が、それにしても、そこに大きな意味がある。

その地にその都度、設置される記念プレート（『日中青年寧夏固原市生態緑化示範林』）（示範：モデルの意味）が、その意味の大きさを物語っているだろうし、現地でのボランティアの方と植樹をしながらの、しばしの語らいが、そのことを裏づけてくれた。私自身、これまで中国・内モンゴルでの植林事業派遣団への参加をしてきたものの、寧夏自治区での事業参加は初めであった。改めてこの事業の意味合いを深く感じた一瞬だった。

一行は、日本から私を含めて4人。彼の地で2008年から始まっている事業の4期目のスタートにあたり、その事業視察である。今年の計画では、25haに、21,500本の苗木（雲杉、障子松）を植えるものだ。団長の佐藤晴男IFCC副会長は、当初より参加されている。直前に身内でご不幸があったにもかかわらず、その責任感の強さから、



上・下：ボランティアと一緒に植林。親子連れも。



参加されていたのには、感服した次第である。
固原市では1期の植林後の保育状況も視察した。

【吳忠市で保育状況を視察】

吳忠市へ移動後、「寧夏吳忠市太陽山開発区日中青年生態緑化モデル林」事業地（2010年～2013年実施）の保育状況を視察と記念植樹を行った。「そうそう、ここ、ここ」と佐藤団長が当時の記憶を紐解きながら、現地の様子を語っていたのは感慨深かった。当時の関係者も駆けつけてくれて、佐藤団長としばしの歓談もあった。事前資料では承知していたが、灌漑設備がしっかりと敷設されていることは印象深かった。所要所に井戸が掘られ、そこから管が引っ張られ、株元に灌水がされるように穴のあいた管が張り巡らされているのである。年間降水量が、200ミリ以下ならば仕方ないことだが、その丁寧さに驚きの感がぬぐえなかった（日本のハウス内ではよく見られることだが、これをこんな広い地域でやるとは…）。

今回、中青連の劉宇紅さん、IFCC北京支局長の劉憲良さんにはお世話になった。北京で合流して「空路いざ銀川へ」とのつもりが、出発は大きく遅れ、そのうち、「今日は飛行機は飛ばない」ことが判明。「さてどうするか…」。





上：大きく根付いたアカシアの木。木の根元には灌水用のホースが巡らされている。
右：太陽山開発区の事業地記念碑の前で。



煩わせた。もっとも私たちは想定外の新幹線（高速鉄道）に乗ることができて、快適な時間を過ごすことができたが…。

翌日、飛ぶかどうかもわからず、結局、西安経由の陸路で行くことになった。お二人、とりわけ、劉宇紅さんには

2018 固原植林派遣団 日誌 ～～寧夏・固原市及び吳忠市の事業地を訪ねて～～

【1日目】東京⇒北京

目的地の寧夏・銀川にたどり着けず

羽田空港国際線ターミナル3階CAチェックインカウンター前集合。今回は4人の派遣団だ。

中国国際航空(CA)にて北京へ。ほぼ予定通り。10分くらい早く着く。着後、入国審査。入管、荷物ピックアップして入国手続きもスムーズで60分くらいで済む。IFCC北京事務所の劉さん、センターの劉宇紅さんと会う。

国内線にシャトルで向かい手荷物検査。搭乗ロビーのいつもの熊本ラーメン店で昼食(11:30~12:30)。

12:10ごろ遅延のアナウンス。14:00発になるとのこと。心配になり早めに搭乗口に向かう。13:10にフライトキャンセルのアナウンス。

ここから苦難の道が始まる。

①フライトは全てキャンセル。翌日のフライトは全て満席。②高速鉄道で西安に行き固原へバスで行くコースを寧夏と調整。OKとなったが、今日の鉄道チケットが取れない。③しかたなく翌日西安に向かう案を選択し、本日は北京どまり。この判断をしたときはすでに14:25。空港の外に出て、また中に入りターンテーブルコーナーで放置されて(?)あった荷物を受取る。監視員もおらず不用心極まりない。④市内に向かって走り出すが、今度はホテルが取れない。市内をさ迷う。バス運転手はご立腹。やっと北京西駅近くの「紫玉飯店」を取れたとのこと。ホテル近くの夕食時はすでに18:00。⑤ホテル20:00チェックイン。20:30ホテル近くを散歩。

【2日目】北京⇒西安⇒固原

事業地固原まで北京から14時間の苦行旅

06:30ホテル発で北京西駅に向かう。

駅の入りかた。手荷物検査⇒(この時チケット、パスポート要)⇒待ち合いロビー⇒番線プラットへ。待合ロビーで朝食用のハンバーグとコーヒーを買う。

07:45西安に向け出発。高鉄だが各駅停車だ。13:45に西安西駅着く。昼食で車内駅弁を食べたが良く覚えてい

ない。出迎えに寧夏青年団の温部長付秘書の何雨さんが来ていた。彼らも御苦労さまだ。多分、寧夏の省都・銀川から10時間くらいは要したであろう。

14:20ごろバスで固原に向かう。通常だと5時間くらいという。距離を記録しなかった。

途中、高速道路工事のため迂回して山越えをする。固原のホテル着は20:40。西安から6時間20分くらい要した。位置関係が良く分からず帰国後チェックしたら西安から甘肅省の平涼市を経由していく形になっていた。

途中のサービスエリアでの休憩は1回しかなく厳しかった。

高速出口で固原市青年団の面々が待っていてくれた。御苦労さん。

21:00から1時間夕食。固原市青年団副主席・夏廷文、事業地の西吉県青年団主席・馬小龍が参加。

固原のホテルは変更となっており泊まったのは西港航空飯店。

【3日目】固原⇒西吉県事業地⇒吳忠 半日遅れで固原事業地の開工式へ。

08:30にホテルを出発し、目的の事業地に向かう。

◆「日中青年寧夏固原市生態緑化モデル林・第四期事業地」



事業地記念碑碑文を説明する西吉県青年団主席・馬小龍さん

のある西吉県の役場まで1時間くらいかかり、そこから事業地までまた1時間ほど。10:30ごろ事業地に着いた。

開工式には夏廷文・固原市青年団副書記、馬・西吉県青年団書記、陳・西吉県林業局長らのほか地元民、ボランティア30人ほどが参加。

西吉県人口60万人ほどでうち30万人が外で働いている

らしい。主な生産物はじゃがいも。出稼ぎ農工が多く貧しい県らしいが、自慢と誇りは中国人らしい。上海の復旦大学学生が教師としてボランティア滞在しているとのこと。

11:30 に植林終わり、西吉県役場がある街で地元料理



固原市事業地第一期に立つ記念碑の前で

で昼食。その後、固原市の一期、三期事業地の保育状況を視察。担当者たちが待っていてくれた。

14:30 ごろ呉忠市に向け固原を後にする。

途中、サービスエリアで中寧県青年連合会書記の女性と会う。今回も立ち寄る予定だったが移動に半日のロスが生じパスとなったところ。

呉忠市内のレストランに 19:40 ごろ着。20:40 ごろまで食事。呉忠市青年団副書記・馬氏が参加。

その後、市内散策し発展ぶりに驚く。呉忠市人口 120 万人という。21:40 ホテルチェックイン。

【4 日目】呉忠⇒太陽山開発区事業地視察⇒ 銀川空港⇒北京

目を見張る 8 年前の事業地

保育視察のため 08:30 ホテル発、09:30 に 8 年前に開始した事業地に着く。

◆「寧夏呉忠市太陽山開発区日中青年生態緑化モデル林」



太陽山開発区でも記念植樹。土が硬い。

事業地(2010 年～2013 年実施)は風力・太陽光発電の一大基地でもある。保育状況視察だが、記念の補植の準備がされている。記念碑は少し移動させてのではないかと思う?しかし植林した樹種は立派に成育している。アカシアは太さ 15 センチはあるようだ。

その後、古代遺跡「水洞溝」見学を小 1 時間。全体を見学するには 2 時間以上必要とのことだが時間がないので、長城跡を眺めて引き返す。昼食は時間がないので「水洞溝」観光地内の露天そば屋のようなところでインスタント麺を食す。美味しい。

13:30 銀川空港着。CN 便で空路、北京へ。16:40 北京空港着。ホテルまでは渋滞で 18:10 ホテル着。18:45 から

中国国際青年センターとの意見交換の交流会。

【5 日目】北京⇒東京 復路は安堵の旅

09:20 ホテル発で空港へ移動。12:50 発の中国国際航空(CA)にて帰国の途へ。復路は予定通りで安堵。

いろいろ体験の旅だった。

記:鎌田 篤則

感想・内モンゴルで友情の絆、平和の証 バイラルラー・ダラーウーラジー

吉元 富士男

まず最初に本ツアーでお世話になった中国、モンゴルの方々そして同行日本人メンバーの方々にバイラルラー(モンゴル語でありがとう)。

私は定年退職後、奈良県で減農薬野菜栽培をする農業人です。今回のツアーについては「植林」がテーマですが、何か野菜作りに役立つヒントがあればと思いつつ参加させていただきました。私が気づいたことは、

1 北京から目的地の多倫までバスで七時間かかるのですが途中、川はありません。ですから水田がなく稲作は不可能ということがわかります。

2 栽培されているのはジャガイモ、とうもろこしがほとんどでした。降雨に期待するしかない中国での野菜栽培の苦労が同じ農業人として良くわかりました。3 又同じように、植林にしても降雨量が大きく影響するという旨の説明を受け「緑の架け橋プロジェクト」の難しさがわかりました。

農業は自然には勝てません。しかし現代農業では、品種改良等により自然に「負けない」方策がとられています。近い将来中国の農業が大きく改善されることを期待します。

そしてゲルでの体験宿泊、当日は村のお祭りの日であり私達も参加させていただくことになりました。岩手大学の若い先生お二人の「イッテ Q・モンゴル相撲参加」があり、勝敗は別としてお祭りは大いに盛り上がりました。宿泊先のゲルで美味しい手作りの夕食を頂いた後、ゲルでのメインイベントは「第一回モンゴル・日本友好故郷歌合戦」でした。参加者全員の歌声はモンゴルの星空に響き渡っていました。「モンゴル・日本友好故郷歌合戦」はこれからも友情の絆として、そして平和の証として永く歌いつがれていくことでしょう。それでは、ダラーウーラジー(またおあいしましょう)。(奈良県曾大根地区農家組合長)



「2018年植林と草原の風にふれる旅」

内モンゴル・多倫県で2件のプロジェクト



灤河源第四期事業地で保育状況視察

【レポート】日中青年灤河源生態緑化モデル林事業 「活着率低さ」を懸念

藤田 泰崇

2018年7月20日。前日までの豪雨の影響が各所に見られる中、2017年に植林したエリアから視察を行った。植林地における第一印象は、残念ながら「活着率が低い」であった。同行したメンバーも一様に同じ感想を抱いていた様子である。多倫県林業局の担当者に詳しく話を聞いた所、通常は比較的降雨量の多い4月から5月に植え付けを行うものの、2017年は降雨量が極端に少なかったため、作業を11月に行ったとの事であった。このことが活着率に悪影響を及ぼしている可能性がある。また、灌水によって活着率を上げることも可能ではあるが、給水車を手配して灌水を行うのは非常にコストがかかるため、補植



植栽した第四期の障子

によって目標とする70%の活着率を達成するとの事であった。なお、実際の植林作業は地元の農家に下請けに出しているとの事である。とはいえ、林業局も資格を与えた（トレーニングを受けた）農家にのみ作業を任せるなどの監督を行い、事業費の支払いも一年目に全体の4割、二年目三年目に3割ずつと、作業に緊張感を持たせられるような工夫をしている。

続いて、第一、二期のエリアを視察した。こちらは活着率（つまり生存率）が非常に高く、成林はほぼ確実であると感じた。このエリアでは植栽列に幅50cm、深さ30cm程度の溝が切られており、この溝が苗木周辺の水分環境を改善している可能性がある（2017年の植林エリアでは苗木毎に直径50cm程度の穴を掘る方法）。土壌の攪乱を最小限にするため植栽方法を変更したとの事だったが、活着率との相関を調査する必要があると考えられた。

植栽されている樹種は樟子松、苗木は4年生苗を用い、植栽列の幅は4mである。これは重機の移動を踏まえたも

のと考えられたが、具体的な回答は得られなかった。植栽間隔は70cm程度と非常に近かったが、これは成長した間引き苗を都市緑化用として販売するためである。つまり、これらのエリアでは砂漠化防止の緑化と同時に緑化木の生産を行っており、緑化木の販売が現地における現金収入の一つになっている。植林時の4年生苗は一本当たり3元だが、2m程度まで成長させたものは100円で売ることができるようである。ただし、市況の状態によって出荷量を調整しているとの事である。

伐期は50年との事であったが、伐採後に再造林するの
かを尋ねた所、「それは50年後の人が考える」という何とも心許ない回答であった。なお、このエリアの土壌は礫がほぼ見られない砂質土であったが、翌日視察した蒙京津冀青少年生態緑化モデル林と比較すると粒子が細かいと感じられた。したがって土壌の保水力は高く、適切な対応を行うことによって緑化は可能だと考えられた。しかし、粒子が細かいという事は、風によって飛散しやすい事も意味しており、確実な緑化が望まれるのは言うまでもない。実際、このエリアから舞い上がった砂が北京、天津の大気汚染の原因の一つ、というデータもあるようだ。

（岩手大学農学部演習林専門職）

【レポート】蒙京津冀青少年生態緑化モデル林プロジェクト 植林し「多くの野生生物」を観察

渡邊 篤

2018年7月21日。天候は曇り時々小雨の中、蒙京津冀青少年生態緑化モデル林プロジェクトにおける第4期の記念植樹と第1期～第3期の事業地視察が行われました。

7月21日午前、第4期の記念植樹は本プロジェクト責任者の靳さんをはじめ、青少年発展基金の呂さんや林業局の方、現地スタッフ、そしてマイクロバスの運転手の方も加わり、総勢16名での作業になりました。現地では既に苗木とスコップが用意しており、現地スタッフが石灰で植樹箇所を約2m間隔にマーキングし、そこに残る全員で植付を行い、最後にホースで根元に灌水するという作業の流れでした。

記念植樹の際に気づいた点として、苗木をビニールカップから外してみると、直径1cm程度の主根が長さ5cm程度に切れ、その他の細根はほぼ見られなかったことから、地上部に対する地下部のバランスが活着率に影響を与える原因の一つなのではないかと考えました。また、ビニールカップを外さずに植栽する場面もあったことから、将来的な土壌や生態系に与える影響を考慮しなければならないと思われます。しかしながら日本の拡大造林期にもこのようなことが無かったとは言い切れず、今後は土地所有者側の意識の醸成が大切になってくるかもしれません。

記念植樹を午前で終え、午後は蒙京津冀地区の第1期～4期事業区を現場視察しました。ここでは午前と同様のメンバーで3期、2期、4期、を訪れ、植樹した障子松の生

育状況や、補植状況を確認しました。加えて、健全な森林状況の指標の一つとして、生物多様性も重要な要素である

蒙京津冀・事業地で記念植樹



ことから、移動中も含めてすべての現場において様々な生物も目視で観察しました。

生育状況：林業局の担当者曰く、障子松の林齢は、輪生した枝ごとの樹幹の長さが1年分の成長量であると推定できるとのことで、日本の北海道に分布しているトドマツに似ている印象を受けました。土壌が砂浜の様な砂質土であったが、生育は旺盛なものでは1年で20cm以上樹高生

長している個体もみられました。一方で、枯死や先枯れしている個体も見られ、水分状況と土中の通気環境が心配され、今後は植栽後の活着率をさらに高めることが課題となると思われます。

補植状況：上記の水分状況や土中の通気環境等が原因で、枯死してしまった個体を補植した様子を確認しました。事前に出席した「緑化事業の概要レクチャー」によると、雨季に合わせて4～5月に補植・新植作業を行うようで、今年補植されたであろう障子松もみられました。

生物相：目視で観察された生物は以下のとおりです。全体の印象として、前日に視察した灤河源よりも多くの種が観察されました。

哺乳類：1種（プレーリードッグ）鳥類8種（キジ♀・ツバメ・猛禽（ホバリング）・モズ・カラス・カササギ・スズメ・ホオジロ）、昆虫類9種以上（チョウ3種：シロチョウ・シジミチョウ・タテハチョウ、バッタ2種：バッタ・キリギリス、ナナフシ1種：ナナフシ幼体、コウチュウ2種：シデムシ・ゴミムシダマシ？幼虫、ハエ2種以上、ハチ1種）※spは省略

（岩手大学農学部演習林専門職）

【行動記録】

2018 植林と草原の風に触れる旅

麻生 臣太郎

全員で、顔合わせを兼ねた夕食会が開かれた。メンバーの自己紹介の他、IFCCの鎌田さんのこれまでの活動や、宮秋さんからは内蒙古の現状や漢民族との関係など今回の訪問地の情勢を聞くことができた。

7月20日 多倫県へ移動
灤河源生態緑化モデル林事業地視察

ホテルを7：30に出発し、北京を北上し河北省を經由して内蒙古自治区多倫県へ向かった。総距離350kmほどでほとんどが高速道路を利用した移動であった。道路事情が昔よりかなり良くなっているとのことで、移動時間の割には快適であった。北京では高速道路と並走して新幹線の路線が建設中で、道中にある河北省の承德市豊寧も山間にあるにしては大きな街で、15階建ての住居が立ち並んでいた。急峻な山間を抜けた先にも大きな街があり、多くの人が往来している様は中国経済の発展がまだまだ続いていることを実感させる光景であった。さすがに内蒙古に入ると草地が多くビルが建つような大きな街は見られなかったが、高速道路はそのまま多倫県まで続いていた。途中で小休止を挟みつつ、6時間半ほどで多倫県へ到着した。到着後、我々はIFCC北京事務所の劉憲良さん、内蒙古共青少年发展基金会の靳志海さん、共青团多倫代表副書記の唐さんと合流し、その後、多倫林業局公益林管理約站站长（多倫林業局公的福祉林管理ステーション）の高岭さん、内蒙团委青少年发展基金会的吕东波部长（呂東波部長）らと合



多倫県の担当者らと三年の事業総括を行う。

今回我々は、内蒙古多倫県へ蒙京津冀青少年生態緑化モデル林事業、日中青年灤河源生態緑化モデル林事業の視察へ7月19～24日の日程で赴いた。

7月19日 羽田から北京へ

早朝、羽田空港国際ターミナルで、IFCC 鎌田篤則理事長、NPO アジアロード宮秋道男理事長、同木原勇副理事長、今回の参加メンバー佐藤慎次さん、私の同僚である岩手大学演習林の藤田泰崇さん、渡邊篤さんと合流した。私は中国へ初の渡航であったが、出国直後に早速中国の洗礼を受けることになった。北京空港は天候が悪く雷が酷い状況であることに加え、空港付近で軍事演習が行われているとのことで我々の便の出発は延期になり足止めとなった。鎌田さん宮秋さん木原さんの3人は慣れた様子で「これも良い経験だよ」と終始落ち着いており頼もしく感じられた。結局飛行機に搭乗できたのは7時間半後の16：30過ぎとなり、北京に到着すると20時を過ぎ日も暮れていた。

多倫県への移動は翌日となり、通訳の劉宇紅さんと合流した我々は北京空港から6キロ程のところにある启航国際ホテルに宿泊した。ホテルでは関西国際空港から一足先に到着していた吉元富士男さんとも合流し、今回の参加者

2018年度（24回）派遣団参加者

| | | |
|--------|---------|-------------|
| 佐藤 晴男 | 固原市 | IFCC 7 団 代表 |
| 宮秋 道男 | 固原市・多倫県 | NPO 亞洲道路 |
| 木原 勇 | 固原市・多倫県 | NPO 亞洲道路 |
| 吉元 富士男 | 多倫県 | 奈良 |
| 佐藤 慎次 | 多倫県 | 東京 |
| 藤田 泰崇 | 多倫県 | 岩手 |
| 渡邊 篤 | 多倫県 | 岩手 |
| 麻生 臣太郎 | 多倫県 | 岩手 |
| 鎌田 篤則 | 固原市・多倫県 | IFCC |
| 劉 憲良 | 固原市・多倫県 | IFCC 北京事務所 |

流し昼食を摂った。

昼食後、多佐市市街地から北東へ30kmほどのところにある灤河源生態緑化モデル林事業地を視察した。事業地責任者である多佐林業局の高嶋さんから現在第4期目の植林であるとの説明があった。広大な面積に障子松が植樹さ

灤河源プロジェクト第四期事業地



れており、遠目には問題なさそうであったが車を降り歩いてみると枯死した苗木がいくつか散見された。国の指針では活着率が7割で成功と認められ、本事業地では8割の活着率であるとの説明があった。一帯は草原になっており表面は草で覆われているが、その下は完全に砂地であった。障子松の詳しい樹種特性は分からないが、事業地を見る限りカラマツやクロマツと比較しても砂地や乾燥にかなり強い印象を受ける。

砂地で吹きさらしの土地で8割の活着率は高い方だと感じた。本事業地は地下水が豊富であることや捕植をしている影響が大きいかもしれない。障子松の苗木は4年生の障子松を用い、豊富な地下水を汲み上げて植栽時に給水している。苗木の成長は5~15cm/年で樹高が2mを越えた段階で苗木を間引き、間引いた苗木を市街地の緑化用に売却する。どの苗木を間引くかは市場の動向を勘案して行うとの説明があった。間引いた苗木の価格は2mで数十円、3mで100円程度とのこと。苗木の植栽間隔が非常に狭かったため、数年後に間引いて苗木を売却すると聞いて納得した。本事業地は草原の緑化と同時に市街地緑化の苗木生産の苗木ともなっており、苗木売却による収入もあることから、本事業地は緑化事業に留まらず、地域の産業的な意味合いも持っていると感じた。

その日の夕食は多佐市のゲル風レストランにて、今回視察する2つの事業地の関係者が集い熱烈な歓迎を受けた。おのおのの自己紹介や内蒙古訪問に至った動機などを話すうちに宴会は盛り上がり、斬志海さんの美声による華やかな歌を聴くこともでき、楽しい夜を過ごした。

7月21日 事業説明と植林

蒙京津冀青少年生態緑化モデル林視察

午前中は宿泊した草原花海歓迎您ホテルの会議室にて蒙团委青少年发展基金会的吕东波さんと多佐林業局の高嶋さんの双方からの本事業の概要と経過について説明がなされた。まず、青少年派遣基金の吕东波氏より本事業の概要が説明された。70~80年代の環境悪化を背景に中国政府指導の下砂漠化対策が実施され、2000年との比較において多佐の森林率は6.8%から37%へ、緑化率は30%から80%になったとの説明があった。内蒙古中部にある多佐市の緑化事業により、北京や天津の環境保全にも繋がっている。その後、多佐林業局の高嶋さんより林業局のプロジェクトが9年3期まで無事終了している報告と、実際の植

林作業における取組みについて説明があった。どちらのプロジェクトも専任の管理人を選定し病気や防火、盗伐への対策を実施しているとのことであった。また、植林に関わる人の教育の重要性についても指摘されていた。樹木は成長が遅いため、森づくりが続いていくためには活動を継続しながら、変化する状況に応じて森林を維持していく人材の育成は必須であり、本事業を牽引している方々はその重要性をよく理解していると感じた。

その後、我々は多佐市外南西の高速道路脇にある事業地に移動し実際に植林を行った。1.2mほどの障子松の苗木を30本程植栽した。スコップで直径40cm、深さ40cm程の穴を掘り、障子松の苗木を入れ、苗木の根を再び埋め戻す。踏み固めた後に根本を囲うように円形に土手を作り、その中にひたひたになるまで水を注いだ。苗木は栄養カップと呼ばれるビニール製のポットに入っているが、植栽の際、ポットを外すと根が球状で非常に小さく、どうやって根付いているのか不思議であった。しかしながら、砂地に根付く障子松は極端な自然条件への適応があるのであろう。日本で植林するカラマツなどは、水分が多いと根腐れを起こし、すぐに枯れてしまう。逆に砂地では水分が枯渇してしまい、植栽時に給水するだけではとても足りない。日本は土壌条件に恵まれ多様な樹種が天然で更新しているが、一旦砂地となってしまうと多くの樹種は生き残れない。砂漠化からの回復は容易ではないことを改めて実感



し、その難しさに気付かされた。

その後蒙京津冀青少年生態緑化モデル林プロジェクト第1期~第4期の事業地視察に赴いた。事業地はホテルから30km東にある河北省との境近くの温塘河村から3km程北上したところに第1~4期の事業地が並んでいる。植樹した障子松は順調に生育している列もあれば、無くなっている列もあったが、第1期では我々の身長と同じぐらいに成長している苗木もあった。土壌は相変わらず砂地であったが、灤河源のモデル林よりも植生は多様であり、障子松の下層植生は比較的豊かであった。

その後多佐市内へ戻り、夕食後は各々ホテルへと徒歩で向かったが、途中寺院などを見学して回った。また、日が暮れてからは夜市へ足を伸ばした。余市は多数の飲食屋台と果物や野菜などの生鮮食品が売られており、日本の各地にある朝市に似た印象を受ける。かなりの賑わいを見せていた。また夜市に向かう途中には野外のバスケットコートがあり試合を観戦するギャラリーが多数集まり賑わいを見せていた。

7月22日 ゲル民泊

今回の参加者は宮秋さんと通訳の娜日娜さんの案内で内蒙古ゲル泊へと向かった。直線距離では多佐市街地の北部

40km程のところであり、2台の車に分乗して高速道路を使いながら西廻りで元上都遺跡の脇を通り約2時間 80km程の道のりであった。我々の宿泊先は娜日娜さんのご実家で夏季に生活しているという場所のゲスト用のゲルでお世話になった。娜日娜さんの娘さんや息子さんとモンゴル語と日本語を相互に学んだりお茶をご馳走になった後、タイミング良くナーダム祭りが開催されるとのことで見学に向った。民族衣装を纏った伝統舞踊や馬頭琴の演奏とホイミーを聴くことができた。また、急遽モンゴル相撲にも参加する事になり、非常に貴重な体験となった。夕食は木原さんが苦労して持ち込んだ蕎麦と、娜日娜さんのご家族一緒に作った餃子をご馳走になった。宴会はモンゴル人の運転手さんも含め草原王で饗され、吉元さんの音頭で懐かしい歌謡ショーへと発展し遅くまで楽しい時間を過ごした。

7月23日 内蒙古から北京へ

飲みすぎの寝坊により早朝の牛の乳搾りは見学のみとなってしまうが、我々がご馳走になっているチーズやヨーグルトの原料は家畜で担っていることが理解できた。20ℓほど絞った牛乳を運ぶ手伝いをしたが、その牛乳が1日分の大切な食料であると思うと何ともいえぬ緊張感で、たった十数メートル運ぶだけでも逆に足元がおぼつかなくなった。また、モンゴル鞍での乗馬を体験させていただき非常に有意義な体験となった。何度もご馳走になった揚げパンやミルクティーは優しい味でとても癒やされた。

多倫州へ移動後、昼食を摂り、我々は北京へ移動した。北京では中国国際青少年交流センターの副所長の洪桂梅さんと夕食を頂いた。洪さんは岩手県の大船渡にホームステイしたことがあるとのことで、私は岩手県民としては嬉しい縁であると感じた。日中の友好化や、相手国を理解するためには、研修等は長期間でなければならないと説いていたことが印象深かった。人を育てることの重要性は今回携わった関係者が共通して主張されていた。

7月24日 帰国

最終日は私を含む岩手大学のメンバーと鎌田氏が早朝の便で帰国し、宮秋さん、佐藤さん、吉元さんは北京を観光して帰られたようである。

今回のツアーは私にとって非常に有意義な時間であった。観光地ではない場所で現地の人と交流し、同じ時間を共有できたことは意義深い。各地では常に歓迎され沢山の料理とお酒で豪華におもてなし頂いたが、そのどれもが現地の日常の延長線上にあり、彼らの生活の一端を垣間見ることができた。日々の生活や文化を理解した上で初めて、相手が抱える様々な問題の共有が可能であると思う。今回のツアーでは、鎌田さんや宮秋さん、木原さんを始めとした関係者から深い理解に基づいた相補的な温かい友好関係を感じ取ることができ、内蒙古を理解する良い機会を与えて頂いたと思う。そしてツアー参加者にも非常に恵まれ、宴会は常に笑いと楽しさの限りを尽くし素敵な夜の連続であった。内蒙古と、特に中国に対する印象は随分と良いほうへ変わり、私にとって実り多い体験であった。IFCC鎌田さんをはじめ、アジアロード宮秋さん木原さん、ツアーでお世話になった関係者の皆様と参加者の皆様と



感想・内モンゴルの草原の風にふれて

佐藤 慎次

今回の旅行に参加のきっかけはNPO「アジアロード」理事長の宮秋道男氏主催の活動、長野県東御市での休耕地利用農業支援に参加した際、お誘い頂いた。

計画を聴くと、現在71歳の私には又とない機会、旅行への参加動機は兎に角、通常は行くことが出来ない地域への好奇心で即応募した。

1日目 出発遅延トラブル発生。現地時間19:05到北京着。多倫まで往けず北京泊となった。

2日目 北京ホテルにて朝食（おかゆがあったのが幸い、持ち込塩昆布で一息!）。朝食後、マイクロバスで北京から万里の長城を経由し多倫へ。途中高速SAでお土産 ひまわりのタネ、干牛肉、酒購入。6時間余500*₀超の道程。多倫着は正午過ぎ。午後、3台の車で植林事業地へ移動、広大な植林草原を見学。

3日目 多倫 6:00起床。朝食まで近所の超市で買い物物価が安い!!（主夫感覚で）。午前中は蒙京津冀プロジェクト地で記念植樹し、一期～三期の保育状況視察。仰天の経過が判明、三期事業が終了していない、如何に報告処理?

4日目 朝食後、我々ゲル宿泊隊は2台の車に分乗、移動。昼頃、ゲル宿泊のお宅に到着、昨年お会いした家族との再会、挨拶を交わした。宿泊ゲルに荷物を置き歓迎のお茶会で、ミルクティのドーナツが提供され歓談。たまたま14時からお祭りがあるとの事、車に分乗して会場へ、民族衣装を着た女性の踊りのリハーサルらしいがお祭りはまだの様だった。後程、聴いた話では16時から開始との事だった。馬群、ラクダ、羊などの群れはお祭りを盛り上げる雰囲気のための演出。ゲルの組み立て速さを競う競技、人間楽器のコーラスと踊り、本場のモンゴル相撲に岩手大学職員2名が参加し盛り上がったが夕食の為、祭りの途中で宿泊ゲルへ帰宅した。

大きめのゲルに食事の用意された、日本から持ち込んだ日本そばが給仕されたが冷たい水がない場所では本物を味わうのは難しいのではと感じた。深夜、ゲルの外に出ると満天の星、久しぶりに「天の川」を見た。

5日目 出発まで数人引き馬で乗馬を楽しんだ後、多倫市経由で北京へ向かった。途中、小用で止まった所に養蜂場があり、そこであまり考えもせず蜂蜜壺を購入してしまった。中国からの土産を喜ぶ人は?未だに処理に困っている。最後の北京の夜、参加者一同で旅行お別れの懇親の宴。「マイクロバス内での異臭」の話題で大いに盛り上がった。

6日目 天安門広場まで地下鉄で散策。地下鉄では持物検査あり、天安門広場への中国人は身分証明書、外国人にはパスポート提示を要求の物々しい警備には驚かされた。

素晴らしい旅 謝辞。（東久留米市在住 社会福祉士）

